2017年8月 No.92

JOCV千葉OB会報

2017年8月
No. 92

夏号

1. 麗澤大学から青年海外協力隊現役合格者が続々出ています（大学のPBL型体験学習とは）

６月２日付けの読売新聞くらし教育面の『教育ルネッサンス』に、『授業増える課題解決型』というタイトルで麗澤大学にて導入が図られてきている体験型学習”Project Based Learning”（以降、ＰＢＬと称する）が取り上げられた。ＰＢＬとは文字通り、学生自らが課題を発見し、問題解決の方法を考え出し、自らが体験的に問題解決のためのアクション（プロジェクト）を実行するものである。

記事の中で取り上げられたのはネパールで麗澤大学の国際協力専攻学生達が行っている『減災教育プロジェクト』だった。事実、ネパール大地震の際に子供たちが沢山犠牲になったが、多くの子供たちは逃げ遅れたり、間違った行動を取って被災してしまった訳であるが、学生達は「震災復興のために何かやりたい・・」という思いで１回目の渡航をした際に、「学生でも出来ることは子供たちへの減災教育だ」と気が付いた。所謂、プロジェクト発掘・形成を行った訳である。

何故そのようなＪＩＣＡの国際協力プロ団体がやる様な事（勿論、レベルは大きく違うが）が出来たのかと云うと、この学生達は私が専任教授を務めている国際交流・国際協力専攻の学生であり、１年生～２年生に掛けて、世界の問題構造や、物ごとの Plan-Do-See サイクル、ＰＣＭ手法を学んでおり、その間の夏休み・春休みには国内外でのボランティア活動やスタディツアーに積極的に参加して、国際感覚やボランティア精神を早くから養っていたからであろう。

今回、読売新聞に取り上げて頂いた事例はネパールの減災教育プロジェクトであったが、それ以外にもミクロネシアの環境教育プロジェクト、カンボジアの交通安全教育プロジェクトが実施中であり、間もなくフィリピンでの食育教育プロジェクトも立ち上がる。

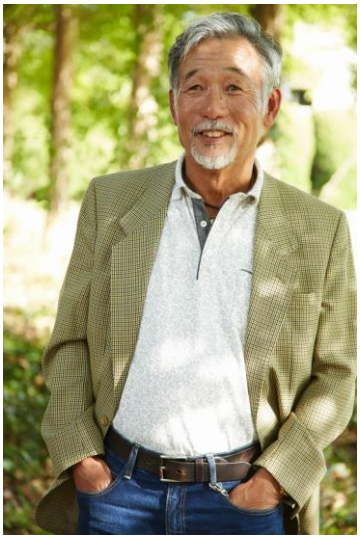
これらのＰＢＬで実体験して経験値を積んだ学生の中から、この２年間で青年海外協力隊に現役合格を果たした学生が４名も出てきている（１名はミクロネシアに環境教育隊員で派遣中、１名はこの夏から派遣前訓練に参加し野球指導でコロンビア派遣予定、他２名は１次試験合格で２次試験まち）。ここで、特記しておきたいことは、ＰＢＬをより有効なものとするために協力隊の経験者の方のお力添えが少なからずあったし、これからも更なる力添えを是非お願いしたいと云う事である。

どの様なお力添えを頂いたかを紹介すれば、国際協力専攻の授業の中での青年海外協力隊体験談講座を１学期に１回は必ずやって頂いているし、国際協力専攻の１年生が入学した際の２泊３日のオリエンテーション・キャンプの際にはＪＩＣＡ地球ひろばに訪問し、地球案内人（隊員ＯＢ）の方から国際ボランティアのお話を伺っているし、５月の協力隊祭りの時には会場手伝いをさせて頂いている。また、映画『クロスロード』の鑑賞会もやっており、やがて国際協力専攻に入ってきた学生の中からは必ずと言っていいほど、卒業後に協力隊を目指したいという学生が出て来るわけである。そんな意識に芽生えた学生達には駒ヶ根訓練所または二本松訓練所での体験入所も毎年行っていますので、学生達は必然的にＰＢＬをやるようになるのである。

大学教育のグローバル化が叫ばれるようになって約１０年位が経った。この間に日本全国で７００以上もある大学の中で、ＰＢＬを積極的に導入している大学は年々増えてきており、今では約３割の大学がＰＢＬを実施している。しかし、本当に学生達に臨場感のあるＰＢＬを提供できている大学はまだまだ少ないのではないだろうか。その様な現状を鑑みれば、大学教育の場に青年海外協力隊の経験値はもっともっと需要が増していくと思うのである。その需要は教員にとどまらず、寧ろ、学生支援やキャリア支援に広がっていくと想像している。

そんな状況を先取りした協力隊ＯＢ会と大学とのモデル的関係を千葉県ＯＢ会と麗澤大学の間で創り出していきたいと考えている。

副会長　成瀬猛
S52-1 シリア 土木施工



目次

1. 副会長　麗澤大学から青年海外協力隊現役合格者が続々出ています（大学の PBL 型体験学習とは）
2. 報告事項
3. 現地活動レポート（派遣中隊員寄稿）

H28-2	植原　正雄	モザンビーク	数学教育	船橋市
H28-1	高橋　直美	ホンジュラス	小学校教育	柏市
H28-1	鵜澤　光佑	マダガスカル	コミュニティ開発	印西市
H28-2	杉原　康彦	PNG	小学校教育	市原市
H28-1	古川　南	マラウイ	小学校教育	千葉市
H28-2	本間　みどり	タイ	理学療法士	千葉市
H28-2	大澤　太郎	ブータン	建築	我孫子市
H28-1	熊澤　杏里	ウガンダ	小学校教育	船橋市
H28-1	芝崎　恵美	ベトナム	障害児・者支援	千葉市
H28-2	宮野　幸恵	ソロモン	PCインストラクター	旭市
H28-2	山口　燿	フィリピン	養殖	柏市
H28-2	山口　明彦	タンザニア	看護師	市原市
H28-2	椎名　麻衣	キルギス	コミュニティ開発	船橋市
H28-3	森下　徳顕	ボリビア	サッカー	柏市

4. 年会費納入に当たってのお願い　　5. 編集後記　　☆お知らせ

2. 報告事項

1）総会について

平成 29 年度総会は、4 月 15 日（土）、15：00 からいつもの浦安市国際センターにて開催されました。出席者は前年より少し少なめの 21 名でした。平成 28 年度活動報告について、イベント等は例年通りでしたが、本年度初めてかもしれませんが、派遣中隊員への支援を 2 件行いました。社団育てる会が実施している「小さなハートプロジェクト」で井上由惟子ブータン隊員（H27-1、体育）申請の「救え、崖っぷちの子供たちプロジェクト」で学校にフェンスを設置する資金の一部を寄付し、もう一つは、JICA「世界の笑顔のためにプログラム」で三塚麻貴バヌアツ隊員（H26-3、看護師）申請の車椅子 3 台と松葉杖 4 組を所属先の病院に寄贈しました。車椅子等は千葉県海外協力隊を育てる会を通して千葉市の（株）フロンティアと言う企業が無償提供してくれました。

決算も収支バランス良く、４万円強の黒字でした。これは会費収入が安定したことが大きな要因だと分析しています。年 2 回の会報発行も定着して、住所がわかっている千名以上の全ての会員にお送りしていますので、その効果もあったかもしれません。もっとも一番盛り上がったのは総会終了後の懇親会でした。新浦安駅前のショッピングモール内の居酒屋に老若男女が集い、楽しい語らいの場となりました。

2）JOCA 評議員会と社員総会について

6 月 17 日（土）評議員会と 18 日（日）定時社員総会は、当初東京の OMYC で開催される予定でしたが、急遽会場が宮城県岩沼市に変更されました。変更理由は正直良く分かりませんでしたが、今後の JOCA は復興支援や地方創生に大きく舵を切っていることもあり、評議員や会員に被災地岩沼を見学してもらって、JOCA 方針に理解を深めようとしたのではないかと推測しています。

会場は 2011 年の東日本大震災で津波の被害で家屋が流された海岸近くの仮設のテントで開催され、JOCA が被災地支援プロジェクトとして実施している羊の牧場に隣接していたため、白熱した議論も、時折聞こえる羊ののんびりした鳴き声でトーンダウンしてしまいました。

夕刻には懇親会が開かれ、外務省増島審議官や JICA 越川副理事長、菊地岩沼市長になぜか鳥取県南部町の陶山町長さんもご出席されていました。（JOCA が地方創生事業を南部町でもやっているからのようです。）更に、山本青年海外協力隊事務局長、村瀬東北支部長、洲崎二本松訓練所長など JICA からはオール

スターキャスト勢ぞろいって感じでした。

翌日の社員総会での驚きは「JOCA 本部の駒ケ根移転」でした。えっ？なぜ？と多くの出席者が思ったようです。担当理事の説明は「地方創生」と言うキーワードを何回も使って説明しましたが、内容は今一よく分かりませんでした。最後には理事長が出て来て補足説明を行いましたが、それでも理解できた出席者はどれくらいいたでしょうか、はなはだ疑問でした。今年度末で賃貸契約が切れる現本部の家賃が JOCA の財政に与える影響が大きいので、地方創生もあり協力隊に縁のある駒ケ根に移転しますと言ってくれた方がまだ良かったかもしれません。それでも出席者からは「二本松ではなく、なぜ駒ケ根か？」との質問が出され、回答は歯切れの悪いものでした。JOCA 設立は 1983 年（昭和 58 年）ですから、34 年もの長い間東京に本部を構え、拡大の一途をたどってきましたが、ここ数年は財政的に厳しい状況となり、遂に都落ちかと言われかねない状況となっています。

本部移転の最大の関心事は社員の雇用の問題です。正社員から臨時社員まで相当な人々が本部で働いていますが、家庭の事情等で駒ケ根に行けない人も出てくることは明らかです。担当理事の説明では東京にも業務上の必要性から東京支部？が置かれるようですから、業務仕分けや人員配置を再整理して、首切りがないように切にお願いしました。はてさて、どうなりますことやら。

3. 現地活動レポート（派遣中隊員寄稿）

H28-2　植原　正雄　モザンビーク　数学教育

私は昨年 9 月にモザンビークへ派遣、11 月から任地であるシャイシャイへ赴きました。シャイシャイは首都マプトから車で 4 時間程のところに位置する都市で、そこで、中等教育学校にて数学を教えています。1 月からの新年度は現地の教員と共同で、9 年生の 5 クラスを担当しています。各クラスには 60 名程の生徒が在籍しています。

現在午前の部の授業を担当していますが、朝が早く、毎日 6：45 からの国歌斉唱で 1 日がスタートします。モザンビークの国家はリピート部分が多く、歌詞も 3 番まであるため、毎朝カップラーメンが出来上がるくらいの時間をかけて歌っています。生徒が国歌をハモって歌うところも、日本とは違うところです。

私の任地であるガザ州では、シャイシャイの他に周囲のいくつかの町にもボランティアが派遣されており、共同でのグループ活動を行っています。その代表的なものとして、ガザ・キャラバンがあります。この活動では、年に数度ボランティアの派遣先へガザ州の隊員が集まり、日本文化紹介を行っています。例えば、ソーラン節講座・折り鶴・習字・日本の伝統的な遊び、その他にも、隊員が作成し持ち寄った模造紙に描いた文化紹介を多数展示します。今年に入ってからも 6 月の時点で既に 3 度開催し、幸い毎回多くの方にご来場頂いています。

他にもこちらの生活で印象的だったこととして、電気・インターネット・テレビがチャージ式だったこと、6・7 月はもっとも寒い時期で、アフリカといえど夜中は毛布 1 枚だと物足りなく感じることもあること、首都や北部の大きな都市に比べるとまだ安全とはいえど意外と身近でも窃盗等が起き得ること、現地通貨(メティカイス)のレートが私が滞在しているここ数か月の短期間でも 1 ドル辺り 80 メティカイスから 50 メティカイスまでの幅で激しい変動があること、停電や断水の多さ、特に断水は数日間続き日常生活に支障が出ることもあること、靴・下着・カバン・財布など、こちらで購入したものは早めに壊れてしまい、日本から持参したものの方が長持ちしていることが多いこと、トタン屋根の家に雨が降ると雨音が凄いこと、任地が州都ということもあるのか思っていたよりは色々と物が手に入ること、庭にレモンや現地の果物の木が生えておりそれらが食べ放題なこと、などがあります。

モザンビークの滞在も約 9 か月が過ぎ、夢の中にラーメン・寿司・温泉が出始めてきたこの頃で日本への多少の懐かしさはありますが、残り 1 年強の派遣期間、日々新鮮な驚きを感じ、新鮮な意欲を持ちながら活動してゆきたいと思います。

【ガザ州の隊員による共同の活動、ガザ・キャラバンにて、習字コーナーを担当した際のもの】

日本やモザンビークの言葉を漢字や仮名を使い表現したり、参加者の名前をカタカナで教え、それを実際に書いてもらったり

しました。

【ガザ・キャラバンにて文化紹介を行った隊員の集合写真（隊員派遣先の教員養成学校にて）】

ガザ・キャラバンでは、現地の布地カプラナで作ったユニフォームを着て活動を行っています。

H28-1　高橋　直美　ホンジュラス　小学校教育　柏市

2017年7月、私はカリブ海と太平洋に面する中米ホンジュラス共和国に青年海外協力隊として赴任しました。塩で煮た小豆と食べるトウモロコシの粉で作ったトルティーヤの味が癖になってきた一方、スペイン語には毎日苦戦し、いつもホンジュラス人の優しさに助けられて生活しています。

活動任地であるグラシアスは、首都テグシガルパからバスで6時間のところにある田舎町です。歴史的な建物やたくさんの商店が並び、情緒ある石畳も魅力的です。整備された温泉やホンジュラス最高峰セラケ山もあり、豊かな自然は故郷を想わせます。首都や北東部を中心にあまり治安が良くないことで知られるホンジュラスですが、私がこれまで出会ったホンジュラス人は皆、陽気で優しく、特に挨拶の時に見せる笑顔は、異国から来た私に大きな安心感を与えてくれました。

断水や停電が度々あるものの、水や電気が無いゆえの生活の知恵や良さがここにはあります。ある夜、外で食事をしていると、突然，街全体が停電に。慣れた手つきで店員さんがロウソクをテーブルに置いてくれました。店内を見渡すと、停電のアクシデントが一転、灯が温かなキャンドルによる演出へ。帰路に就くと、暗闇の中無数の星が足元を照らし、言いようのない美しさでした。家の中では、一本のロウソクとそれを囲む家族の賑やかな会話が部屋を明るくしました。

私の活動は、子どもたちの算数基礎力向上をめざして、現地の先生方と共に教材の使用法や指導法を見直し改善することです。任地の活動校から国内規模へと様々な幅で活動していきます。環境が異なれば、やり方も考え方も違って当たり前。その違いを受け止め、楽しみながら現地の人々に寄り添った支援ができればと思います。陽気で前向きな先生方と切磋琢磨し、子どもたちの笑顔が将来に向け一段と輝くように、自分も日々笑顔を忘れずに楽しく生活していこうと思います。

【活動校：下校前の子どもたちとの一枚】

【活動校（図書室）：第1学年の先生方と授業改善のためのミーティング】

H28-1　鵜澤　光佑　マダガスカル　コミュニティ開発　印西市

任地アロチャマングル県は「マダガスカルの食糧庫」と言われるほどの米生産地です。米どころアロチャマングルの良いところとしてご飯が美味しい、また稲刈り前の一面に広がる刈り取り前の稲穂の美しさなど数え始めたらきりがありません。そんな稲作地でのコミュニティ開発隊員としての要請内容は水利組合の活性化です。水利組合とは農業に必要な灌漑用水を管理する農民の組織のことです。要請以外にも、農村内で7日間コンポスト、家計研修、ドライフルーツの普及活動をしております。

今回は私の本来の要請内容である水利組合の活性化についてご紹介します。配属当初は、「水利組合は大変だから関わらなくていい」と言われていました。しかし、赴任後３か月目に、「本来の要請の仕事をやってくれ」と配属先長から言われ、それまでの活動から方向転換し今の活動が始まりました。

水利組合ってどういう組織なのか？活性化って何か？わからないことだらけの状況の中、水利組合との活動が始まりました。聞き取り調査で情報収集をしても、なかなか現地語を理解できず、苦しみました。早朝から始まる会議やダム掃除にも参加するも、組合員との間に距離感を感じることも。専門的な話題ばかりを聞かれても答えられない自分の無力さに頭を悩ませていました。

自作の質問紙を配布してみたり、会議の後やダム掃除の後に個別で話すなら理解できるかもと組合長に話しかけたり、これならできるかもという方法で自分なりに情報収集に努めてきました。気が付けばもう赴任してから約 11 か月が経過します。少しずつではあるが、水利組合の概要を理解して、どんな問題を抱えているのか、何をするのが良いかなどなんとなく見えてきました。

また、水利組合員との距離も縮まってきているのかなと感じるときもあります。今まではあまり「こいつはマダガスカル語できないから」と言われていたのですが、今は問題や疑問があると連絡が来るようになりました。

現在までは情報集めるばかりで私からこうしてみようと提案できていませんでした。これからは少しずつでも提案をしたり一緒に考えたりして行けたらなぁと思っています。まだまだ試行錯誤が必要な水利組合との活動。水路図を作り、水路工事をする計画もあります。自分には何ができるか常に悩みますが、２年では終わらない活動や目標を水利組合と共に考えて、私のいる残りの期間の活動を考えていくべきなのかなと思っています。

【水利組合の会議中にて活動計画を決めている様子】

【任地でドライフルーツ作りの講習会をしている隊員】

H2 8-2　杉原　康彦　パプアニューギニア　小学校教育
市原市

パプアニューギニア（以下ＰＮＧ）での活動も間もなく１年を迎えようとしています。私は小学校教育隊員として、首都ポートモレスビーから飛行機で 30 分程のポポンデッタという街の小学校（生徒数約 800 名）で活動しています。今年は６年生の数学を中心に担当しています。

生徒は教科書を持っていません。先生は使い古した数年前の教科書を１冊持っています。その教科書を黒板にそっくりそのまま書いていき、それを生徒が写し取るという授業（模写？）が常態化していました。考える習慣がないのです。私の授業は自作の教具を用いながら、時には外で遊び感覚の活動を取り入れ、なるべく飽きさせないように工夫をしています。「ただ写すだけ」の授業から「頭で考える」授業への転換を図っています。それでも初めのうちは「どこから理解していないのか」を探るのに必死でした。結果として「小学校１年生の内容から怪しい（笑）」ということになり、基礎の基礎から授業を行なっています。しかし、８年生時には高等教育課程への進級試験があるので、それに間に合わせるためにはのんびりしている訳にもいかず、６年生内容も並行して授業を進めるよう計画を練っています。このため、　時間がいくらあっても足りません。そこで、担任の先生の不在中にこっそり教室に入って授業を行なっています。日本人という珍しさもあってか、意外にも生徒たちのウケは良く、私が外をプラプラ歩いていると「ミスターYasu！今先生がいないから入っておいでよ！」と言われることもあり、それがまた嬉しくもあります。時には数学を忘れて日本の文化などを紹介することも少なくないのですが、とりわけ彼らの日本語習得能力には驚かされます。「私は男です」「別れる時はさようなら」と教えると、その日の夕方、遠くから「オトコ！サ

ヨナラ～！」と大きな声で挨拶してくれます。そこは「おとこ」じゃないよ、と思いながら。

現地での生活は決して楽なものではありません。いや、活動そのものより生活していくことの方がエネルギーを使っているかもしれません。重い荷物でも歩いて運ばなくてはならないし、何か食べたいときにコンビニは存在すらしません。スーパーに行ったところで陳列棚に物がない時も日常茶飯事。停電、断水･･･。不便なことは枚挙に遑がありません。しかし、その不便さを人々の温かさがカバーしてくれます。断水の時は夜でも川から水を運んでくれたり、食べ物をお裾分けしてくれたり、校長先生は私のことを気にかけて毎晩電話をしてくれたりします。誰でも気軽に挨拶をしてくれて握手をしてくれます。物質的な不便さは日本からでも状況を把握できましたが、それはそれだけの話であり、本当の豊かさは現地で暮らしてみて、物質的な側面に心の豊かさを加えたものであるのだと、自分の視野の狭さに気付かされました。

【6年生の生徒と共に。年齢はバラバラで12歳～16歳まで在籍しています】

【お祭り会場で、ＰＮＧの伝統的な楽器　”クンドゥ“を試し打ち】

H2 8-1　古川　南　マラウイ　小学校教育　千葉市

（1）隊員活動に関すること(業務)

私はマラウイ・カスング県の小学校に配属されています。要請内容は、チームティーチングで理科及び算数を中心とした教科指導の担当となっています。

いま、低学年の子どもたちに基礎計算を教えています。マラウイの子どもたちは日本の子どもたちと比べて計算がとても遅く、間違いも多いです。高学年になっても掛け算九九が定着していない子どもがたくさんいます。なぜ計算が苦手なのか分析したところ、圧倒的な練習量の少なさ、そして合成分解の考え方で計算を教わっていないところが大きな原因だと思いました。そこで、現地の先生と一緒に、数の認識から始め、合成分解の考え方を使った計算を子どもたちに伝えています。低学年の子どもは現地語しか通じないので大変なことは多々ありますが、現地の先生に助けてもらいながら頑張っています。

（2）任国に関すること

マラウイは東アフリカに位置する内陸国です。国土の約３分の１を占めるマラウイ湖や、世界遺産であるチョンゴニロックアート、リビングストニアの滝、ニイカ国立公園などがあります。マラウイ湖は海かと思ってしまうほど広く、人々の生活のための大切な水にもなっています。湖沿いの町サリマ、ケープマクレア、カタベイなどにはロッジもあり、休暇にはマラウイ湖畔でくつろぐことができます。湖沿いに住む隊員は、休日にマラウイ湖にリフレッシュに行ける反面、乾季はかなり暑さにやられているようです。

（3）その他

マラウイ人の好きなところを書きたいと思います。すべての人に当てはまるわけではありませんし、もちろんマラウイ人もいろいろな人がいます。全体的にこういった傾向がある、というのを書きます。

マラウイ人の好きなところは、他人にも自分にも優しいところです。困っていることがあれば助けてくれる。こちらがなにかミスをしても絶対に責めないし、「Osa dandaula!(気にするな！)」と許してくれる。私が一時期食欲がなく痩せたときには、家族のように心配してくれて、「しっかり食べないとだめ！私のうちでシマ(マラウイの主食)を食べなさい！」と家に呼んでくれました。他人に優しいのと同じくらい自分にも優しい。自分のことを責めないし、自分のことが好きなマラウイ人が多いように思います。そのためか、彼らは貧しいけれど幸せそうに見えます。自分に優しく、というのは日本人にとっては難しいことかもしれません。見習いたいなと思うところです。

【サリマのマラウイ湖。人々は、湖で遊んだり、洗濯をしたり、身体を洗ったり。住血吸虫がいるので隊員は入ることを禁止されています。】

【Standard2 での算数の授業の様子。フラッシュカードを使っています。机、椅子がないので子どもたちは地べたに座ります。】

H2 8-2　本間　みどり　タイ　理学療法士　千葉市

タイに赴任してから既に 9 か月が経過しました。常夏のこの地で、初めて寒さを感じないで 1 年が過ぎようとしています。私の任地であるスラートターニー県はタイの南部に位置し、サムイ島・パンガン島・タオ島といった観光地も有名です。

そんな華々しい（？）一面を持ったこの県ですが、私の任地であるバーンナードゥーム郡は町の中心から約 45 ㎞南下した場所にある小さな小さな田舎町です。道の傍らで牛が草を食べ、地域住民の半数はゴムの樹液採取やパームヤシの栽培で生計を立てている、そんなのどかな土地の郡内唯一の病院であるバーンナードゥーム病院が私の配属先となります。スタッフは、医師 5 名、看護師約 30 名、理学療法士 2 名、その他准看護師・歯科医など計 110 名ほどが在籍しています。

任地は 2011 年から JICA の介護プロジェクト事業のプロジェクトサイトとなっており、そこに理学療法士隊員の 2 代目として去年 10 月に赴任しました。私の主な活動内容は、①同僚理学療法士への技術移転　②健康ボランティアや家族への介助・予防指導　③訪問リハビリの普及　④デイケア設立の助言・運営援助　となっています。

タイは日本と同じように高齢化の道を歩んでおり、地域医療の現場では家族の高齢者介護負担が深刻化しています。私の任地では、病院や町役場・保健省事務所など地域間での交流が深く、連携が取れており地域住民間での助け合い精神が強い印象があります。実際には、隣近所や地域の保健ボランティアが訪問して様子をうかがうなどして、地域でフォローし配属先でも訪問看護に力をいれています。しかし、地方でも町の中心から離れると隣近所に家がなく周りから孤立している、一人暮らしで様子がわかりにくい、訪問看護師の不足など、継続的なサービスは難しく虚弱高齢者の寝たきり・介助の増加が課題でした。そこで、前任者の方が日本で行われているデイケアという通所型リハビリ施設を参考に提案し、今年 4 月に旧町役場を利用して高齢者センターとしてオープンしました。

現在、週に 1 度、午前・午後の 2 グループに分けてアクティビティーを中心とした活動を行っています。これができたことにより、外出手段がなく家に閉じこもっていた方々の中には 3~8 年ぶりに友人と会え、感動の涙を流している人もいました。大勢で楽しく活動ができるこのシステムは、陽気で友好的なタイの人々の性質にとてもあっていると感じています。今後この活動を拡大し、多くの人が心ゆたかな生活ができるようサポートしていきたいとお思います。

【タイの住宅風景。段差や砂利道が多い。】

【笑顔あふれるデイケアサービス】

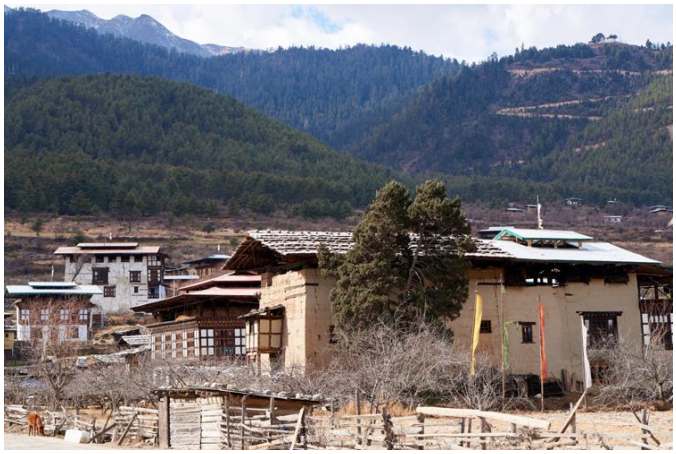
H2 8-2　大澤　太郎　ブータン　建築　我孫子市

歴史あるブータン王国の中で、情報開示後である近年は急激な近代化の波に飲まれているように感じます。そのため多くの情報が入り、近隣諸国からの近代的要素の流入なども多く、新旧入混じった文化が生じてきています。建築も同様で、伝統的な版築壁を使用した工法は減少の傾向となり、RC 造の建物が多く立ち始めています。外観や階数などは国の規定によりある程度伝統的要素が盛り込まれていますが、それ以外の部分はあまり見ることができません。また、急激に近代化されてしまったため、多くの問題点が残されておりそれを解決していくことは、性能向上にそのまま繋がるので重要なこととされています。

そのような状況の中、ブータン建築物の窓・壁の断熱性能向上への手伝いをして約半年、様々な活動を行って参りました。まずは既存の伝統建築工法の住宅調査を行い、現状と問題点の把握を行いました。その後問題点を各々改善していくような提案を行っています。近年では多くの最新技術が流れてきており、ブータンでもその内容や性能の良さを理解しています。ただ、金額（特に輸送費用）が高いことと、伝統的工法への適用が難しいことなどがあり、上手に活活用できていません。

そのため自分の活動は、出来る限り安価で、なおかつ国内の資源を有効に利用出来る様、最新技術を少しだけ流用して、少しでも断熱性能を向上させるような提案を行うようにしています。その際、どうしてこのように改良したか、どれくらい性能が向上するかといった理論やシミュレーション方法等をブータン人スタッフに理解してもらい、自分だけではなく彼らの視点での技術向上も同時に行なっています。そうすることにより、日本の技術力とブータンの伝統が融合した解決策が生まれることも多々ありました。

また、今までは新しい技術に関しては、理解が浅かったために自分たちで考えることをあまりせず、言われるがまま使ってきたとのことでした。この活動を通じて、自分達で考えることによって、よりブータンに適応したものを開発できることを学んでもらえたと思います。現在試作品の作成段階に入っていますが、他のブータン人スタッフ、工場の監督、職人等多くの人たちと意見交換をしながら作成を進めいています。これは非常に良いことだと思います。数ある最新情報を彼らなりに流用・応用し、独自の技術を開発していくことが今後の自分の活動の目標です。その時には自分は不要になりますね、笑



【伝統的建築物と街並み】

【試作品作成の際スタッフ・職人等と皆で協議する様子】

H2 8-1　熊澤　杏里　ウガンダ　小学校教育　船橋市

【ウガンダからこんにちは】

Muli mutya? (How are you?)

現在私は青年海外協力隊として、日本から遠く離れたアフリカ、ウガンダという国で小学校教師をしています。大学で教育学を学び、卒業後すぐに海外青年協力隊として二年間、この地に派遣されました。

そして、今月でちょうど一年が経ちました。よく笑い、よく食べ、いつも明るい人々が印象的であるウガンダ。すれ違うたびに挨拶を交わし合う文化は、居心地の良さを感じさせてくれます。近所の人々は、私を家族のように扱ってくれます。活動から戻ると「クリカヨ（おかえり）」と声をかけてくれ、「ンブッデヨ（ただいま）」と返す。着任前は、一人で頑張らなくてはいけないと思っていたこの遠く離れた地で、こんな人の温かさに触れられたことは大きな驚きでした。そんなウガンダが、そして私の任地が本当に大好きで、残りの任期が一年しかないことが未だに信じられません。

主な活動としては、現地の公立小学校にて算数と体育の指導をしています。教室には電気もなく、生徒は誰一人として教科書を持っていません。生徒たちは、一本のペンとノートを持って登校してきます。60 人以上の生徒が 1 クラスに在籍しているため、学習理解度にもバラつきがあり、高学年でも加算すら出来ない子もいます。年齢層にもバラつきがあり、一年生のクラスに体の大きな 12 歳の子がいるなんてことも。体罰や、教師という職業の社会的地位の低さ。もう何もかもが自分の常識を覆しました。それでも、そんな“違い”から生まれる“新しい発見”を楽しみながら日々生活しています。

そうは言っても、たくさん壁にぶち当たり悩むことも多くあります。詰め込み型の授業に慣れてしまっている子どもたちに意味を理解してもらおうとすると、基礎から始めなくてはならなかったりと、特に授業計画策定には苦戦を強いられています。日本の良いところとウガンダの良いところをうまく混ぜ合わせていけるようになるのがこれからの課題です。

また現在は通常授業だけでなく、教材作りやイベント企画にも力を入れています。掛け算の「フラッシュカード」や、掛け算を覚えるための「算数王」企画、また教科書を持っていない子供たちの学習機会を少しでも増やせればと、いつでも好きな時に学習できる共有の計算ドリルも作成しました。私がこの国に着任するまで、体育の授業すらなかったこの学校で、先日、運動会も開催しました。現地の先生方からも大変好評で、来年はより多くの人を巻き込んで協働していければと考えています。

また嬉しいことに子供たちは私の授業をとても楽しみにしてくれていて、そんな子どもたちの笑顔が毎日の活動に活気を与えてくれます。この子たちのために、そしてウガンダの未来のために私の出来ることを日々模索しています。

私一人の力じゃ何も出来ないかもしれない。何も変えられないかもしれない。だけど、私と過ごした日々の 1 日でも、子どもたちにとってプラスであるように。子どもたちから受け取った愛を倍にして返してあげられたら良いなと。少しずつですが、これからも子どもたちと一緒に成長していきたいと考えています。 Webare nyo okusoma!

【1．休み時間の風景】

【2．スポーツフェスティバルで頑張る子供たち】

【3．算数の授業風景（競って手を挙げる生徒の様子）】

H28-1　芝崎　恵美　ベトナム　障害児・者支援　千葉市

2016年7月、同期7人でベトナムへ。

二本松訓練所で出会った仲間は皆、明るく優しくて、誠実。ハノイでの研修、ホーチミンでの語学訓練も笑いが絶えず、時に熱く語り合った。

8月、それぞれの任地へ。

私は大都会ホーチミン、職場の敷地内に住み、恵まれた環境で生活させていただいている。温かくユーモアに溢れた上司や同僚、目を輝かせる子供たち、親切なベトナムの方々。私はいつも人に恵まれる。欧米からボランティアに来る人々に、私の名前の意味をよく聞かれるが、いつしか「I meet a lot of beautiful things and people in my life」と、答えるようになっていた。

そんなこんなで1年。

ただ、ただ、辛いのは、日々直面する自分の弱さ、無力感。

配属先の障害児リハビリテーションセンターには、朝7時から16時半まで、学校に通えない子供たちが毎日通う。経済的な理由、特別支援学校には試験があるなど、全ての子供たちが適切な教育を受けられない。先生方は少ない情報の中、不安も見せず、プライドを持ってケアと指導に当たる。しかし、諸外国からの断片的な知識だけでは、子供たち一人一人の特性を理解することは難しく、厳しすぎる指導が繰り返される。そして、それに気づけない。子供達の泣き声、困惑した表情、受動的な毎日を送る様子に心が痛んだ。文化、習慣、しつけ方の違い。もっとうまくベトナム語が話せたら、もっと経験や知識があったら…。

そんな毎日が耐えられず、6月に一時帰国した時には逃げるような思いだった。

久しぶりの実家も職場もいつも通り。唯一変化したのは、成田空港に到着してから何もかもがキラキラ輝いて見えることだった。あらまあ。こんなに素敵な街に住んでいたんだっけ。何もかも快適、言いたいことはすぐに伝わる、わかってもらえる安心感がどこまでも続く。相談だって容易にできる。できるのだ、日本語なら。

ホーチミンに戻る時、戻らなきゃ！と、自分を鼓舞した。沢山の資料を抱え、戻った。待っていてくれた子供達、職場の方々、保護者の方々。そして、ドイツ人のボランティア仲間Mareike。日本へ戻る前日に話題にした音楽療法を、彼女がギターを買って始めてくれていた！同僚のNga先生は、子供たちのために装飾した教室の一画を、見て見て！と嬉しそうに見せてくれた。

この1年。欧米からのボランティアも多く訪れ、また、協力隊仲間も来てくれた。その度に相談し合った。

たくさんの人の思いが、少しずつ、子供たちの笑顔につながっていることに、気づいた。

【2017年6月9日　初めての集合写真が撮れた！自閉症児（3~9才）クラス　担任3人、ボランティア2人で、11人への療育を行った。Nga先生（右）、Mareike（左から2人目）】

【2017年6月27日　27年度1次隊送別会：共感し、励まし合える家族のような仲間。作業療法、理学療法を教えてくれたり、相談に乗ってくれたりした先輩方が帰国した。私もあと、9ヶ月！】

H28-2　宮野　幸恵　ソロモン　PCインストラクター
旭市

大洋州、ソロモン諸島よりお届けいたします。

ソロモン諸島の空の玄関口、ホニアラ国際空港のそばに位置するドンボスコ職業訓練校へ赴任して8ヶ月が経ちました。“ドン・ボスコ”という人はイタリアのカトリック聖職者でした。青年に向けて職業訓練校を開講し、父として、友として、先生として生徒と接し、生徒が誠実な市民そして優れたクリスチャンとして成長できるよう教育に専念しました。今日では、132カ国で彼の使命を受け継ぐ神父たちが学びの場を提供してい

ます。

当校は、キリスト教の中でもカトリック教です。毎日朝昼下校前の３回礼拝し、隔週で校内ミサを行っています。私自身、信仰している宗教はありません。日本では、伝統構法建築物が好きなこともあり、寺院や神社へよく訪れていましたが、教会へ行くことはありませんでした。むしろ特別な理由もなく勝手な偏見を持っていました。しかしながら、今ソロモンで生活をし、生徒や先生とともに行う毎日の礼拝や休日には教会でのミサへ参列するなど、ここで暮らす人たちと同じ時間の流れを感じようと心がけています。その中から、普段は納得できない相手の言動の意図や背景を見いだすヒントがあるかもしれないと思うのです。教会に行けば人が集まり情報共有がなされ、これは生徒との交流の手助けにもつながります。

通年、初詣は香取神宮なのですが、今年はある村の教会へ出向きました。教会へ行こう。と自然と気持ちが向いた自分自身に驚きました。

ソロモンで生活する中で文化の違いに戸惑うことも多々あります。赤道近くの常夏の陽気がそうさせるのか基本的に皆さんのんびりで、時間を追われる日常ではありません。当地では、大雨だから外に出られない、強い日差しの中を歩きたくない、子どもの世話、人が訪ねてきた、携帯は持っているが時間が正確ではないなど、日本では通用しない理由で約束や仕事に遅れることが頻繁にあります。時間と仕事に追われた生活をしていた私は、約束を平気で破る（当初はそう感じていました）感覚を受け入れられませんでした。どうして人に合わせず、自分自身を優先させるのか。ある日、私たちは家族の絆を大切にしたい。という言葉をソロモン人から聞いたとき、気付かされました。普段接する生徒や先生、様々な繋がりで知り合うソロモン人は、愛に溢れ包容力があり優しい心を持っています。これは、家族からたくさんの愛情を受けて育ったからだと思います。学校でもいじめがありません。思いやりを持った人との対話に愛情の深さを感じています。

添付の写真は、“Mary Help of Christians”クリスチャンを祝うミサを校内で行った時のものです。当校の神父３人に加え、ソロモンにおけるカトリック教大司教がミサの指揮を執ります。私と生徒二人の写真は、その日に撮った一枚です。彼女たちの笑顔にいつも支えられています。

【“Mary Help of Christians”クリスチャンを祝うミサ】

【彼女たちの笑顔】

H28-2　山口　燿　フィリピン　養殖

任地イフガオ州マヨヤオ町の紹介　フィリピン国派遣　平成28年度２次隊　養殖　山口燿

Maphod an nanong! (任地の言葉で”おはようございます”)。フィリピン国イフガオ州マヨヤオ町に養殖隊員として派遣されております柏市(旧沼南町)出身の山口燿と申します。この度は、任地についてご紹介したいと思います。

私の任地、イフガオ州マヨヤオ町は、透き通るようが海の近くにあり・・・といいたいところですが、実は首都マニラからバスとバンを乗り継いで１５、６時間ほどかけてようやくたどり着く山の中に位置する街です。

【マヨヤオ町の位置】

ダイビングやサーフィンが楽しめるようなきれいな海からは程遠いですが、その代わり、此処には、広大な棚田の風景が一面に広がっています。

【マヨヤオ町の棚田。　収穫間近】

一説には千年単位の昔から着々と築かれてきたという棚田を受け継いで、マヨヤオ町の人はお米と共に暮らしています。二次大戦中に日本軍の山下将軍が写真奥の山を拠点とし、フィリピン軍と日本軍の間で大きな戦闘があったそうです。山下将軍は大戦中に財宝をどこか地中へ隠したといわれていて、私も任地の方から、「財宝のありかを示す地図は持ってないか？」と冗談か本気かわからない口調で聞かれることもあります。

マヨヤオ町には、棚田と同じく、昔からの伝統が根強く残っています。例えば、田植えの後は豊作を願い鶏をしめて料理するみんなで食べる、結婚式の際は８頭か 12 頭の豚をしめて料理し、訪れてくれた人にふるまう、等です。中でも私が好きなのは、ネイティブダンスと呼ばれる伝統の踊りです。街のお祭りはもちろん、結婚式等でよく踊っている風景を見かけることができます。竹の筒や金属製の銅鑼の音に合わせて踊ります。

【伝統衣装を着けてのネイティブダンス】

私も踊ってみますがなかなか難しいです。

【私も伝統衣装を着てパレードに出てみました。】

最後になりますが、日頃から OB 会の皆さまには、応援していただき、感謝しております。日本に戻るまでまだ一年と数か月ありますが、このネイティブダンスを完全に習得し、また皆様に元気な姿でお会いできるよう、今後も活動を頑張りたいと思います。

H28-2　山口　明彦　タンザニア　看護師　市原市

私は現在、東アフリカのタンザニア共和国のムトワラ州立リグラ病院に看護師として 2016 年 11 月より赴任しています。私の活動は 5S-KAIZEN 活動の普及と推進になります。5S とは整理、整頓、清掃、清潔、躾を意味し、働きやすい職場環境を作る活動です。KAIZEN 活動は問題に対して、現状把握、原因分析、対策考案・実施を一連の流れで行い問題解決へ導く方法です。これらをタンザニア人の病院職員と一緒に行っています。

しかし、当初は思い描いていた活動はできませんでした。同僚達に話を聞いてもらうことができませんでした。また、同僚の看護師や医師は患者さんに対して高圧的な態度をとり、待たせるのが当たり前な様子から尊敬することができず、関係は悪化していきました。活動が思うように進まない中、思い出したのが JICA ボランティアの姿勢である「現地の人々と同じ目線に立つ」という言葉でした。その言葉を思い出した際に、自分は同僚達のことを理解できておらず、同じ目線にたつことがで

きていないと気づきました。そのため、まずは彼らのことを知ろうと考え、彼らと多くの時間を過ごすことにしました。挨拶だけでなく、お互いの近況について話したり、休憩時間に一緒にお茶を飲んだり、仕事の手伝いはもちろん、どんなことを考えて仕事をしているか、じっくり話し合いました。そうする中で彼らの置かれている現状が少しずつわかりました。１人の看護師で 20~30 人の患者さんを受け持ったり、必要な物品が揃わない等過酷な労働環境に置かれていました。また、そもそも医療サービスに対する考え方が異なり、医療者は治療だけでそれ以外は家族が行うという考えを持っています。同僚達のことをよく知らないまま、勝手なことばかりしていたことに気づきました。それからは、仕事を率先して手伝い,空いた時間で私の活動を一緒に進めていったりしました。また、彼らは PC よりも紙に書いてある文字を読むことを好むため、紙芝居にして説明することで聞いてくれるようになりました。そんなある日に「Akihiko きて～！」と呼ばれて言ってみると同僚たちが率先して病棟を整理・整頓をしてくれていました。そして、「きれいになったでしょ。5S やったよ」と誇らしげに話してくれました。私は彼らが自発的に行動してくれたことをとても喜び、同僚と同じ目線に立つことで認めてもらえたことを実感しました。

まだまだ、解決すべき課題は多く残っていますが、これからも彼らと同じ目線に立って共に活動を進めていきたいです。

【同僚と 5S-KAIZEN について話し合っているところ】

【休憩中に同僚と撮影した記念写真】

H28-2　椎名　麻衣　キルギス　コミュニティ開発　船橋市

(1) 隊員活動に関すること（業務）

現在、キルギス共和国イシククリ州の州都カラコル市にて一村一品組合の事務局で活動しています。一村一品組合では、くるみ、玉ねぎ、茜などの草木染を使用した羊毛フェルト商品をはじめ、ジャム・はちみつ・ドライフルーツ等の加工食品や、現地で採れるハーブを使用した手作り石鹸やクリームを生産団体がそれぞれ生産し、取りまとめてお店で販売をしています。事務局では、羊毛調達、羊毛の草木染、生産管理、パッケージ、広告等のデザイン、新商品開発、サンプル作りを一括で行っています。その中で私は新商品開発やフェルト商品の品質管理を現地スタッフと共に活動しています。

新商品開発は、地元の人々がドライフルーツやハーブ等の素材を持ってくる場合や素材を加工して持ってくる場合等様々なので、一人ひとりと話をし、どのような商品を販売したいのか、付加価値を付けて他と同じような商品にならないかを考えながら開発をしています。

またフェルト商品の品質管理は、フェルト商品のサンプルを作る女性たちと一緒に村の生産者を回ったり、事務局に商品を集めて日本に送るための商品を一つひとつ確認しています。私はキルギスに来てからフェルト商品について学び始めたばかりなので商品の品質の良し悪しは現地の女性たちの方が良く知っています。品質を良くするためには、彼女たちの知識を文字化させ、彼女たち以外の事務局現地スタッフが品質チェックできるような方法を作りたいと考えています。

写真は、事務局スタッフ(右 2 人)とともに村の生産者団体のところで聞き取り調査をした時に撮りました。椎名本人は左から４番目。

(2) 任国に関すること（食べ物、習慣、旅など日常生活全般）

「ラグマン」

現地の人がお店でも家庭でも食べているうどんを紹介します。「ラグマン」と呼ばれるうどんは中央アジア全土で食べられており、ドゥンガンという中華系ムスリム教徒の料理と言われています。

任地カラコルにはドゥンガン人が多く住んでおり、レストランや食堂でドゥンガン料理が多く食べられています。日本人の口にも良く合い、トマトベースのスープで野菜と肉が入っています。

キルギスでは、スープうどん、焼うどん風、つけめん風と 3 種類選べます。私は写真のような焼うどん風が好きで、毎週 1 回は食べています。麺は家庭で小麦粉から手作りする人が多いですが、店先や市場で茹でた麺を売っているので、買って調理する人もいるようです。

寒い冬には一杯で身体が温まるので、よく食べていました。ラズーという唐辛子が細かく練られている食べるラー油をかけても美味しいです。

H28-3　森下　徳顕　ボリビア　サッカー　柏市

・柏市サッカー協会所属の柏マイティーFC（(有) マイティー・スポーツクラブ）より現職参加

＊柏マイティーFC　←　柏レイソル業務提携チーム

・主な業務内容

NGO 南ボリビアスポーツセンターにて、青少年に対するスポーツ指導。特に現地のコーチ方と協働して選手達へのサッカー・フットサルのトレーニングの実施。中長期的なサッカーのトレーニングプランの改善、指導者としてリーグ戦へ参加。

CEDEPSUR（ｾﾃﾞﾌﾟｽｰﾙ）

＝南ﾎﾞﾘﾋﾞｱｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰのｴﾝﾌﾞﾚﾑ

子どものサッカーチームの別名が“DIABLOS　DE　ORO”

＝“黄金の悪魔ちゃん”

・志望動機

高校の先輩（ジンバブエ・野球隊員）や大学時代の先輩達（ジンバブエ・体育隊員、ソロモン諸島・サッカー隊員）の方々が協力隊として参加し帰国した時に出会い様々なお話を聞いたことがきっかけでした。小さい頃から世界に興味があり　ずっとやっていたサッカーや好きな体育・運動・スポーツを通して、様々な国の人々と知り合ったり、異文化に触れ　いつかは国際協力・国際貢献ができそうな JICA ボランティアを経験したい

とずっと思っていました。柏マイティーFCで働き始めて１５年、新しい刺激・体験・経験を当クラブや柏市・流山市、東葛地域、千葉県・茨城県の人々に還元したいとも思い始め、（会社からも理解を頂き、現職参加制度を利用し）２０１５年の秋募集（応募年齢制限ｷﾞﾘｷﾞﾘの 39 歳の秋）に応募し、最後の最後　本当に最後のチャンスで運良く合格を頂きました。

2017年1月7日無事に 30 時間以上かけて、ボリビアへ到着。初めの 1 ヵ月間は事実上の首都ラパスにて現地語学訓練をしました！

ラパスにあるボリビアオリンピック委員会へ、他のスポーツ隊員（空手隊員、水泳隊員）とともに表敬訪問！

任地（赴任先）の第一印象

協力隊の任地は、『南米最貧国！』＝「ボリビア！？」。

出発した 2017 年１月と、住んでいる今とでは印象が大きく違います。勿論、日本と比べれば（注意を怠れば）危険は多々あります。しかしそれは、どこの国に行っても同じ事です。

そこで、日本では“ ウユニ塩湖 ”がとてもとても有名で、それ以外あまり知られていない南米の国「ボリビア」の現状・魅力を、私の活動報告を通し少しでもご紹介できればと思っております。

私の赴任先は、正式名称→ボリビア多民族国　の南の方に位置するチュキサカ県　スクレ市。珍しく***憲法上の首都***となります。（最高裁判所があるだけで、その他の国家機関はほぼ事実上の首都ラパスに集まっています。）ここスクレ市はボリビア国内でも特に治安やインフラは良く、とても過ごしやすいと感じています。１６世紀に建造されたコロニアル様式の歴史的な建物とたくさんの商店がたち並び、情緒あるとてもきれいな街並みです！1991 年その街並みの美しさからユネスコによって世界遺産（文化遺産）にも登録されています。

地名の、スクレは、ボリビア独立の父（初代大統領）であるアントニオ・ホセ・デ・スクレにちなんでつけられたみたいです。

街の中心部に位置する公園はきれいに整備され、いつも街の人々の憩いの場となっています。幼稚園から小中学校、大学までたくさんの学校（教育機関）もあり、学生の町でもあります。

【雲がとても近くに見える、標高 2500～2800mのスクレ市の田舎の風景】

【スクレ市内の街並み】

任務への意気込みなど

本団体はスクレ市に拠点を置き、青少年に対するスポーツ(サッカーを中心にフットサル、体操、キックボクシング)の指導に特化したNGO的な団体です。

サッカーの指導の質向上を目的として、それを達成するために様々な角度からアプローチしていきたいと考えています。また、サッカーのオフ・ザ・ピッチの面で、規律・ルールの大切さを伝えつつ、クラブの代表と相談しながら「様々な青少年活動」も実施していきたいです。

言葉・文化・習慣の違うここボリビア（スクレ）では、現在新しい刺激の毎日で　ボリビア人の温かさを感じつつも 『異文化理解』 ・ 『創意工夫』 ・ 『現場対応』 ・ 『語学（スペイン語）力』 に追われている毎日でもあります！

ボリビアの公用語であるスペイン語をさらに勉強して、積極的にコミュニケーションを図りたいと思います。

【石ころだらけの、状況の悪いグランドでのトレーニング風景】

【7才以下のスクレ市内の大会に出場！（大会は人工芝のグランドで！！）】

【コンクリートのフットサル場にて、練習後の監督 Leonardo さんのお話中。】

ボリビアのスクレ市内にはたまにきれいな人工芝のグランドもけっこうあります。大会で使用！

（グランド使用料が高くて　お金に余裕の無い当クラブではなかなか使用ができませんが、、、）

【１０才以下のフットサル大会へ出場！】

【スクレ市内の観光名所ミラドール（展望台）付近の教会！】

【カテドラル（大聖堂）前にとまっている、観光バス（恐竜公園行）！】

【久しぶりに、人工芝のグランドで練習ができ、記念に！】

【練習風景（練習前のお話・・・）！！】

【練習風景！】

サッカーの話を少々、、、女子サッカーは南のサンタクルス市が盛ん！　スクレ市の女子サッカーはあまりまだ整備されておらず、レベル面も普及の面もまだまだ。

　男子サッカー　ボリビアの代表に入るのは首都のラパス・サンタクルス・コチャバンバの３大都市のクラブからばかりらしい。ボリビアのプロリーグ、、、数回見ただけだが日本のJ2～大学サッカー位のレベル・・・しかしコパリベルタドーレス（南米ｸﾗﾌﾞ選手権）で海外の強豪クラブと戦う時は、それなりにレベルの高い・激しい試合も行えるので、一概にレベルを日本と比べる事は出来ないと感じた。すごく波がある。何をやるにしても気持ちが大きく左右されている。

代表もクラブも子供たちも　強い相手とはそこそこ良い勝負をする（例：ﾎｰﾑ　ラパスで　ボリビア代表２－０アルゼンチン代表）、しかし弱い相手ともだらだらと同じレベルでサッカー・行動することになる傾向がある。

スクレ市内は、SUB7（U-7、７才以下）のカテゴリーから公式戦がある。１１人制で５号球。自由交代なし。大人とルール全く一緒。コートが多少小さく、時間が短いだけ。

SUB１０　フットサル　→　１５分ハーフ

SUB7、9→２０分ハーフ　SUB11→２５分ハーフ

SUB13、15→３０分ハーフ

SUB17、19　→　４０分ハーフ　　Libre　→　４５分ハーフ
また、規律･ルールの大切さを伝えつつ、ｸﾗﾌﾞの代表と相談しながら「様々な青少年活動」も実施していきたいです。

　気になった点　→　話を聞く態度・集合・集中力・理解力、大人の話し方、、、大人も子どもも　ごみを平気でそこらへんに捨てる！！

（スクレ市内の様子）野良犬がとてもとても多い！日本の車ばかり！漢字もたくさんマイクロバスに付いている・・・
日本の中古の車・マイクロバスばかりある。
ここまでは、“想定内”、日本での経験・仕事内容とほぼ同じ感じですが、貧しい NGO 的なｸﾗﾌﾞのため、サッカーの練習道具をチームの代表 Leonardo さん（以下、Leo）が自ら工夫してつくっているみたいで、そのお手伝い（雑務）も大事な活動となっております！（途上国らしさ満載！）

　下記写真にもありますが、ｸﾗﾌﾞ事務所（兼 Leo の自宅）をﾁｰﾑｶﾗｰの黄色と赤にペンキで塗ったり
（＊6 月に県外のﾁｰﾑを招待し当ｸﾗﾌﾞ主催の大会を開催するため、現在ｸﾗﾌﾞ事務所の模様替えをしているようで・・・）、背番号のﾌﾟﾘﾝﾄを自分でやったり、ラダー・ミニハードルを、どこかで資材をもらってきて、これまたﾁｰﾑｶﾗｰにペンキで塗ったり作成したりと、今まで自分がやったことのない“モノづくり”もやらせてもらい、途上国ならではの　とてもとても良い経験になっております！！

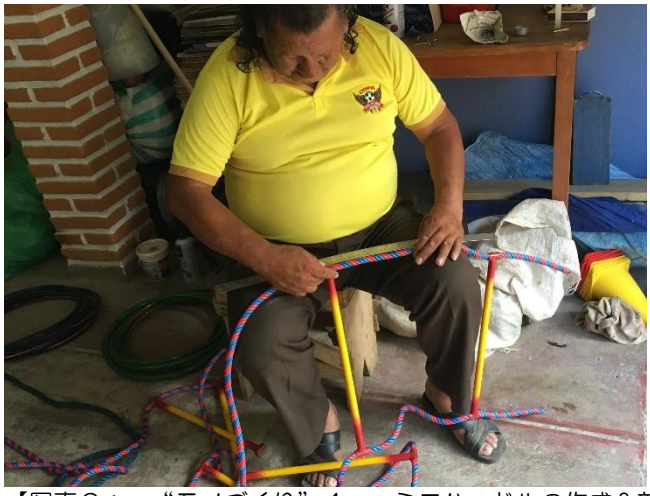
【写真１：スクレ市の街並み！】

写真２：南ボリビアスポーツセンターのメンバーと“時折”使える人工芝のグランドで！

【写真３:～“モノづくり”１～　クラブ事務所のペンキ塗り！】

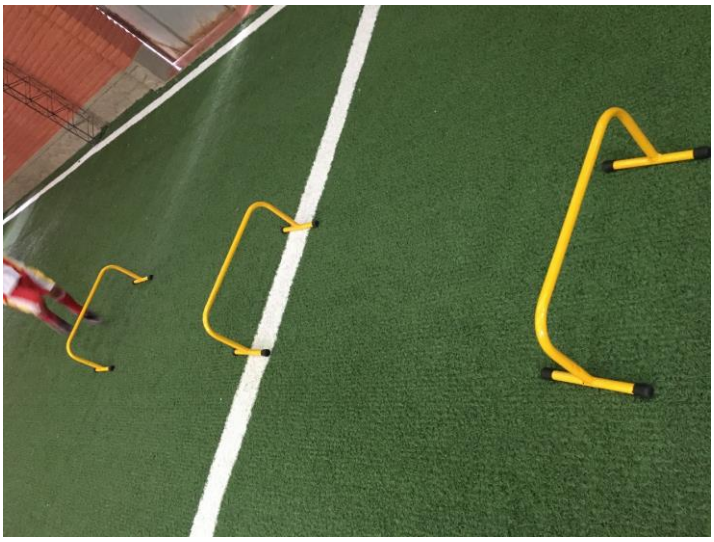
【写真４：～“モノづくり”２～　ユニフォームの背番号を自分でプリント作業中！】

【写真５：～“モノづくり”３～　ｸﾗﾌﾞ代表の Leonardo さんとラダーを作成中！】



【写真６：～“モノづくり”４～　ミニハードルの作成＆部品ペンキ塗り！子ども達と！！】

【出来上がった！自前の練習道具・・・ﾐﾆﾊｰﾄﾞﾙとラダー】



【ボリビア　スクレ市のスタジアム】
エスタディオ　パトリア　でプロの試合　ボリビア１部ﾘｰｸﾞのｳﾆﾍﾞﾙｼﾀﾘｵ（ｽｸﾚ）２　VS　１　ｽﾄﾛﾝｹﾞｽﾄ（ﾗﾊﾟｽ）
＊ストロンゲスト→前期のボリビアチャンピオンで現在コパリベルタドーレス杯の予選に参加中！

4.年会費納入に当たってのお願い

毎年、年会費（一口 1,000 円）の納入をお願いしておりますが、昨年度は 144 名の皆さんから 20 万円を少し超える会費を頂戴しました。会員数は 1,248 名ですから 11.5%の皆さんから会費をいただいたことになります。現在の会の運営費状況から「**目標 200 名 30 万円**」を掲げたいと思っており、一人でも多くの皆さんにご協力いただきたいのはやまやまですが、それには一口以上のご協力をいただかなければなりません。年金生活者となりつくづく思うのは、1,000 円でも大変かなってことですが、会の活動と同様に無理のないように、引き続き、よろしくお願いします。

尚、振込に際し「住所、氏名」は必ず記載されているものの、「**隊次**」や「**派遣国**」が記載されていないことも多く、納入者リスト作成上困っています。お手数ですが、必ず隊次と派遣国を書いていただくようお願いします。（浜田）

5.編集後記

今回の会報は、なんと過去最大の 20 ページとなりました。派遣中隊員からの寄稿が思ったより多かったのが要因ですが、これは嬉しい悲鳴です。対象者 26 名中 50%の 13 名が任国から原稿を送ってくれました。派遣中隊員の原稿を読んでいていつも思うのは、遠き昔の自分の隊員活動です。こればかりはいつの時代も大きな変化はなく、みんな精一杯頑張っているなとつくづく思います。協力隊事業は今年で 53 年目、応募者の減少に歯止めがかからず、協力隊事務局は隊員確保に四苦八苦しているようですが、抜本的な発想の転換を図り、斬新なアイデアで事業の再構築を図る以外に道はなく、なにより協力隊事務局職員が事業に対する熱い思いをもって業務を遂行することが求められています。志ある若者をしっかりと受け止める度量、熱意なくして協力隊事業の明日はありません。全国の OB 会も昔は良かった的な思い出に浸るのではなく、協力隊事業は今も正に生きているのですから、何ができるかを自らに問いかけ、協力隊事業の発展に寄与したいものです。昔の青年も今や後期高齢者が少なくありません。前期高齢者の私が言うのもなんですが、〇〇高齢者は人数が多く、元気印が多いのが特徴のようです。国内であれ海外であれ、旅行しているのはたいていがシニア世代、隠居暮らしは後にして、世の中のためにまだまだ働いても良いのではと思っています。死ぬまでボランティアしましょう。（浜田）

～お知らせ～

ホームページのご紹介

当会ホームページにて、定例会/協力隊ナビ/講演会/懇親会等、各種イベントのスケジュールや、活動報告を掲載しています。URL は下記ですが、「青年海外協力隊千葉 OB 会」で検索していただくことでもアクセスできますので、是非ともご覧ください。

青年海外協力隊 千葉 OB 会 ホームページ： http://www.jocvchiba.net/

メーリングリスト/facebook グループのご案内

上記ホームページにて、当会のメーリングリストと facebook グループへの参加をご案内しております。是非ご参加ください。

連絡先　お問い合わせや会報への寄稿は info@jocvchiba.net までお願いします。